

## 熊谷直好伝補遺

兼 清 正 徳

昭和三七年一二月に『熊谷直好資料集』を碧冲洞叢書第二八輯として築瀬一雄・熊谷武至氏と共編で公にし、続いて『熊谷直好資料集第二冊』（碧冲洞叢書第四〇輯）を昭和三八年一〇月に、『熊谷直好資料集第三冊』（碧冲洞叢書第七四輯）を昭和四二年八月に築瀬一雄氏と共編で公にし、また、『熊谷直好伝』を昭和四〇年五月に公にしたが、その後の数年間に直好に関する新史料の若干を知見することができたので、前記の諸著に補訂を加えるため、この小論を記すこととする。

### 一 景樹と直好との確執

文政九年五月に直好は備前国岡山に赴いて、古今集についての景樹の解説を講義しているが（直好伝 三〇〇頁）、直好のこの

岡山遊説の結果について、師景樹には甚だしい不満があった。次の備後国沼隈郡鞆港の中村応雅宛香川景樹書翰を見よう。

(前略) 扱当年(註、文政一〇年)も熊谷岡山下向之約ニ而、其御辺へも巡行之事、一向不<sub>レ</sub>参候。去夏(註、文政九年五月)同士岡山行、甚不評判ニ而、僕迄失<sub>三</sub>面目<sub>一</sub>候事ニ御座候。定而世評御傳聞と奉<sub>レ</sub>存候。扱々田舎漢遺恨之至ニ候。

当春岡山藩中宮堀・丹羽・杉山・渡部・光岡ナド申人上京ニ而暫滞京、不<sub>レ</sub>悟入精ニ而御座候。是等ト潜ニ相談シ、景樹下向之事も催候へ共、何分熊谷余毒遺候而、景樹ヲモ國人忌嫌候。□□今一兩年後ナラデハト申事ニ御座候。明春も岡山連出京ニ而、岡崎邊寄宿之約ニ候得者、其節申合、来春一諸ニ罷下候歟、又来々春歟、是非見物ガテラ下向之下心ニ御座候。其砌者其邊迄御尋可<sub>レ</sub>申候。(以下紙切)

(中村龍雄氏藏)

この書翰の内容は、景樹門下十哲の筆頭として、景樹の股肱とも自負する直好にとっては実に重大な衝撃である。些細に景樹書翰の内容を検討しよう。

まず、文政一〇年に直好は前年に引きつづいて岡山に下向する予定であり、鞆港の辺りまでも巡行する筈であるが、それは不可能となった。その理由は、前年文政九年五月の熊谷の岡山下向が「甚不評判」であったからである。

岡山から帰京した直好に対して岡山の伊藤重義は、

天の原なりはためきし雷の 今もとどろにひびきこそすれ

と歌を送り、これに対して直好は、

ともすれば雲間あやまつ雷の いかなる跡をのこしおきけむ

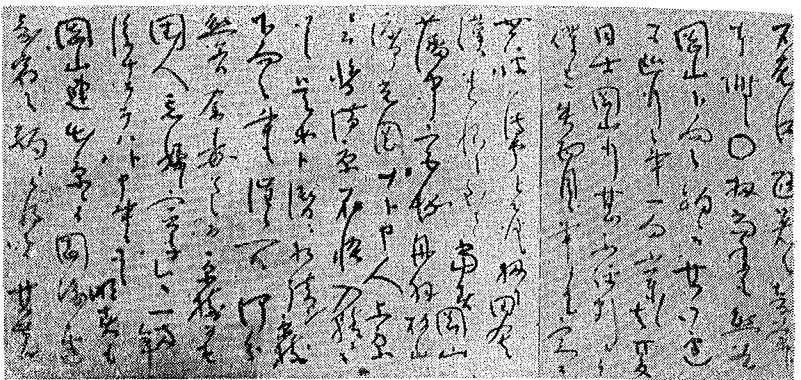
(浦良の)

と反省している。岡山での直好の指導はかなり峻烈であったし、それだけに岡山では直好に対するかなりの反撥があり、それが「甚不評判」となって景樹の耳に伝わったことが察知できる。

直好の不羈奔放な性格からくる特異な歌学指導が、岡山の歌人たちにとっては納得できないものであり、そのために師の景樹は「僕迄失<sub>三</sub>面目<sub>一</sub>候」と不評の波紋を受け、それは世間一般の「世評」となって喧伝されたので、景樹は直好を「田舎漢」と極めつけ、この田舎者の我意我説は景樹にとって「遺恨之至ニ候」と言わざるを得ないほどの痛恨事であった。誇り高い景樹としては「景樹ヲモ國人忌嫌候」ことは憤懣やるかたない直好の行為であった。

そこで景樹は、歌学修業に上京した岡山藩士宮堀・丹羽・杉山・渡部・光岡と「潜ニ相談」して、直好の岡山再度下向を阻止するとともに、直好が岡山に残した「余毒」を払拭するため、景樹自らが下向の事も企てた。しかしそれも今しばらくの猶予期間を置くこととして、「来春」に下向することとし、できれば備後鞆にまで足を伸ばしたい意向を示している。

景樹が、門下双壁の直好と木下幸文とのうち、幸文に対してはしばしば痛烈な批判をおこなっていることは、これまで一般に知悉されているところであったが、直好の歌学指導をこれほどまでに非難している史料はこれ



中村応雅宛香川景樹書翰 (中村龍雄氏藏)

が唯一のものであろう。

## 二 文化四年の京都における直好の動向

「桂園遺稿」の文化四年八月一五日の記事に、「こよひは例の真如堂に行て月見んと契つる都人も、終日降りつる雨にさはりけん、くるるまでどひとりもくる人なし。空もいよいよ雲ふかし。……此ころ宿りませる紀成・直好ふたりの主を伴ひてかの山にのぼる。おかれて斧木ぬしも来ませり。さて題を分つほど、月もいとよく晴れたり。鹿も鳴いでたり。」とあることを引用して、直好が景樹家に寄宿して歌学に専念していたことを述べたが（直好伝）、この八月一五日の月見のことに関して、この一行に加わらなかった木下幸文は、「こよひの月見は、例の善光寺にと岡崎人の契ありしかど、日ひとひ降りみ晴れみ、さだめなきに、風さへ野分たつこちすれば、かくてはとやみぬ。……さるほどにくれもてゆく、雨はやみにけり。……かくてひとり五条の橋に出でたるほど、月はいやてりにてりまさりける。」（木下幸文日記）と記している。

独り五条橋畔に月見をする幸文とは別に、景樹・直好・斧木・兎山紀成らの神楽岡（吉田山）での月見に関連して次の逸話がある。

京都岡崎なる桂園の庵にて門下の人々集りし折、今宵こそは吉田の山に鹿の音聞かんと師のいひ出でければ、皆同意して、雨催なれば人々傘を手にして出立つ。吉田山に到れば夜更け雲晴れて月面白う出でぬ。折から待設けたるゆかしき声はさやかに聞ゆ。皆あなやと打喜ぶ。されど景樹をはじめ誰も詠出づるものなし。その時学僕（今古歌謡所収）のよみたるは、

吉田山今宵は鹿のなかぬ夜と 思ふ峯より三声をきけり

景樹打聞きて大に驚き、名吟々と口を極めて賞めそやす。他の人ますます口を嚙みて詠出で得ず。帰るさに、熊谷直好はじめかの学僕を推尊して、持たせたる傘を取戻し、その人の手を煩はさざりしぞ一興なりし。惜しいかな名を佚せり。（吉田健次翁語）

景樹ら一行の吉田山真如堂の月見と聞鹿に伴をした学僕とは誰であるか。文化二年のころまでは秋長（後の玄如）がいたが、文化四年には三河国正宗寺に赴いているので、「名を佚せり」のままに留めておく外はない。

この年の歳末に、木下幸文は備中国笠岡の高橋正澄宛書翰の中で、

（前略）熊谷うしのいへにあり。もはら（前略）いうそくにかかりて、夜も日もなし。御言つたへ侍りぬ。ぬしもこん年には一たびかへりて、又ものほりぬべきけしきなり。（後略）

しはす六日

幸文

正澄君

（西山楼）  
扇氏藏

と云っている。幸文・直好ともに一二月に在京したのは文化四年のみであるので、この書翰は文化四年一二月六日付のものであることが推定できる。かつこの書翰には、「香川大人もいたはりがちにおはせり。このもとはひさしくなには・伊丹わたりにあそび給へり。」とあって、景樹は文化四年一月二八日から伊丹に滞在、一二月五日にはまだ伊丹にいたので（桂園遺稿）、このことを指しており、また、直好が来年には帰国の予定であると記しているのは、翌五年二月に実際に帰国した事実からも肯定できる。

ともあれ、直好・幸文は同居して勉学に余念がなく文化四年を送った。

三 天保四年および同五年における直好の動向

天保四年八月一日、中秋の名月を須磨に仰いだ直好は、遠祖熊谷直実のゆかりの須磨寺に参詣し、法楽和歌を捧げた。

寿永の昔、(熊谷直実)我祖軍門に立て、(宗敬)卿の管絃の声を聞いて初て厭離の心あり。卿を討ていよいよ発心を決すること世のしるところなり。

今遠孫直好、中秋を賞んがためここに遊ぶ。因に此寺に詣で、蘇合香序一帖を手向奉る。順逆の法縁如<sub>レ</sub>是。卿願くばこれをうけたまへ。

いにしへの雲も煙もめぐり来て たちも隔てぬなみの上かな

右須磨寺法楽和歌並詞

天保四年八月十五日

入道蓮生二十五世孫熊谷直好しるす

(須磨寺藏)

天保五年三月に、直好は天保元年の吉野花見(直好伝 三二九頁)に続いて、二度目の遊山に出かけた。この年の「吉野紀行」は『熊谷直好資料集第三冊』(昭和三十二年八月刊行)に収録したが、この資料集は直好伝刊行後のことであるので、資料集第三冊を未見の読者のために、ここにその概要を記しておく。

三月一二日、妻良子と共に天王寺の住居を發ち、河内国分村の西尾勝重(本稿一四頁参照)を訪れ、一三日に従者も連れて四

人で国分村を發ち、当麻寺に詣で、土田まで行って一泊。

一四日、六田川を渡り、一の行場のあたりまで登る。桜は盛りである。

谷風に吹あけくるる桜花 やがて雲にや成らんとすらん 直好

よしの山花のさかりをけふも見て あすも見ましと宿や定めん 勝重

竹林院の庭も花盛りである。奥の院に詣でる。西行庵にも行く。如意輪寺に詣で、御陵も拜む。「此あたりの花、夕ばへに成ていとよし」。福屋に泊る。

一五日、雨戸をあけて花を見る。

よしの山尾上の里に旅ねして 花の木間の花をみる哉 直好

鶯もおのが春とや鳴たける 芳野の山の花のさかりを 勝重

千本の中の道より飯銅に下る。桜の渡しを渡り、上市の千又より寺かけ峠に登り、竹のはたで昼食をし、まとい峠を越え、堂(巻)の峯に詣で、長谷の追分に泊る。

一六日、長谷寺に参詣し、追分で勝重と別れて奈良に足を向ける。

四 如月軒詠藻について

多治比郁夫氏藏の「如月軒詠藻」一冊は、半紙青野の本文五〇丁に表紙・裏表紙各一枚を付した一冊本であって、縦二四纏・横一七纏である。

如月軒とは誰であろうか。この詠草のうち「百首之内獨摘若菜」以下の一九首が、「熊谷直好等一座百首和歌」

(熊谷直好資料集、熊谷直好遺稿第二十八輯)の中に儀超の作として収められている。

平瀬儀超は、直好が文久二年に歿した時に墓碑文を撰び、その中で「余從翁受業于今五十五年、其在天王寺、余独不遠其路、寒暑不廢也、翁之視余猶子也。」(熊谷直好略傳)と言っているので、直好の愛弟子であったことがわかり、如月軒はその号であることも判明した。

この詠草には、安政五年正月から文久四年正月までの間に詠んだ短歌三六九首・長歌二首・歌文九が収められているが、このうち直好に関連するものを挙げよう。

松間鶯 師家二月兼題

(三) 春ごとにきなく鶯こづたひて かはらぬまつの色やみつらん

(四) ときはなる松の木をまはなれずも ちよとさへづるうぐひすの声

この歌は「香川景恒遺稿」に「熊谷・下村兼題」とあるのに相当するので、「師家」はすなわち熊谷直好家(長春亭)のことである。二月は安政五年の二月であり、熊谷家月次歌会は毎月九日である。なお、香川景恒家(東塙亭)では毎月二〇日に、高橋正澄家(清園)では各一八日に、山片重中家(風音居) (本稿二〇)では各一日に月次歌会が開かれている。熊谷家(長春亭)の各年各月次会の詠題を順挙すると次のとおりである(月次歌会での儀超の作歌は煩を避けて省略する)。

安政五年 二月(松間鶯 師家二月兼題) 三月(静見花 三月兼題) 四月(峯新樹) 五月(暁郭公) 六月(水風涼)

七月(閑庭秋) 八月(池上月) 九月(ナシ) 一〇月(浦千鳥) 十一月(炭竈雪) 十二月(ナシ)

安政六年 正月(江上春望 長春亭) 二月(野外朝霞) 三月(藤花隨風) 四月(雨中早苗) 五月(新竹露 師家探題)

六月(螢火透簾 六月師家兼題) 七月(庭女郎花 師家七月兼題) 八月(初雁連雲 八月師家兼題) 九月(紅葉映水

師家九月兼題) 一〇月(山居冬到) 十一月(連日鷹狩) 十二月(ナシ)

安政七年 正月(初春見鶴 師家初會兼題) 二月(董業 師家二月兼題) 三月(原春駒 師家探題) 閏三月(杜若 師家

閏月兼題) 四月(葵 師家四月兼題) 五月(雲外郭公 師家兼題) 六月(翟麦 師家六月兼題) 七月(烏鵲成橋 師家

七月兼題) 八月(秋八月兼題) 九月(霧中聞鶉) 一〇月(残菊) 十一月(湖上千鳥 師家霜月兼題) 十二月(早椹

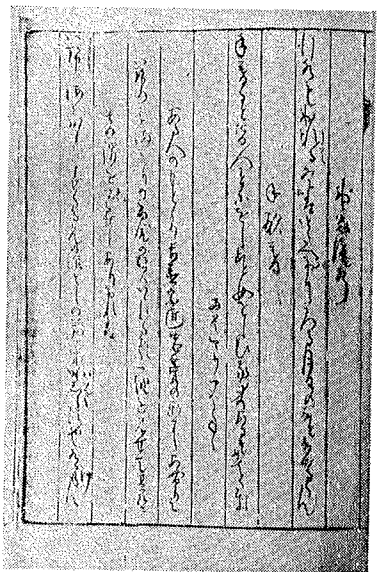
師家臘月兼題)

文久元年 正月(風來楊柳邊 長春亭兼題) 二月(霞中滝 師家兼題) 三月(春夜雨静 師家兼題) 四月(朝更衣

師家兼題) 四月) 一二月(落葉隨風 師家探題)

文久二年 正月(春風先発花中梅 師家初會) 五月(夕採早苗 長春亭五月兼題) 六月(螢火入簾)

以下直好に関連する儀超の作歌をつづける。



如月軒詠藻の一部

香川故大人(景樹) 十七回忌追福ニ無題ニ

而よめよと有につきて、おもひのまゝを

(七八) かへりこぬ春をしのびても、ちどり

君を悲しき音にや鳴らん

同じことを熊谷の大人もすゝめたまひて、

春の楽むかしをおもふといふことを題にて

(七九) きふけふちりたる花もあとなきを

むかしの春をなをなげくらん

香川景樹一七回忌は安政六年三月二七日である。

ある人のもとより、長春亭宗匠若菜の画にあやまりていせのはまぐりの香合の賛かゝれたる一軸を見  
せて、其箱にその謂をしるせとありければ

(二七九) いせの海におもひよせたる老の浪 としの若菜もしらざるや有らん

この歌は文久元年の詠であるので、直好の「老の浪」すなわち八〇歳で、病歿の一年前である。

長春亭大人身まかられしを、香川大人(景恒)いたみ歌有、己も

(三二七) 限りなきはこゝろ也けり君がその 八十一とせを猶たらずして

(三二八) ちよろづといはひ尽せし言のはの 末も限はある世也けり

文久二年八月八日に直好が八一歳で急逝した弔歌である。

秋月添光

(三二三) わきてこのことしの秋ぞひかりそふ 月はかなしきものにぞ有ける

閏八月一九日に直好追悼会が催された時の追悼歌である。

なおこの如月軒詠藻の中から、儀超の交友關係を示す作歌を摘記しておく。

風揺白櫻枝 風音居 (五六) 色もなくなくと見ゆれどうめの花 するきは風のほひなりけり

風音居(山片重中)については、本稿二〇頁を参照されたい。

松有春色 香川兼題 (五八) 打霞む山邊を見れば色かへぬ まつにもしるき春のどけさ

「香川景恒遺稿」の安政六年正月二〇日の東塙亭兼題に同じ題詠があるので、毎月二〇日が香川景恒家(東塙

亭)の月次歌会であったことが知られる。

尋花宿山 清園兼題 (六三) 花をのみたづねくゝて奥山に こよひぬるべくなにおもひけん

「香川景恒遺稿」の安政六年正月一八日に同じ題詠があるので、毎月一八日が高橋正澄(残夢・清園)の月次  
歌会であったことが知られる。(高橋正澄については直好伝三二頁などを参照されたい)

披書知昔 大道寺追善 (七〇) 中々に筆のあとをもとめずば のこるなさけもなからましもの

大道寺忠は安政四年二月一六日に六三歳で歿した。(直好伝三三三頁などを参照されたい)

花勝前年 忠秋賀 (二七七) としごとにかはらで咲る花ならで 去年にまさりてめづらしきかな

(二七八) あら玉のとし立かへりくゝ来て いろもわかやぐはつざくらかな

渡忠秋は文化八年(一八一)の生れであるので、安政七年(万延元年・一八六〇)は五〇歳に相当する。

(渡忠秋については直好伝三六四頁などを参照されたい)

對句花思昔 翁満追善 (二四二) 雪よりもはかなくちらん知花を 見るにつけてもおもふ君かな

黒沢翁満は安政六年四月二九日に六五歳で歿した。(直好伝三三〇頁などを参照されたい)

草山瑞光寺 泰岸師より竹を贈られて歌あり やまにてはうきふしこともしれじとや竹も世に出てなれを

思はん 此返りごと

(二八二) かげ清きその山里を出て世の にごりにそまん呉竹やなぞ

(二八二) 陰清きところの竹もけふよりは うきふし繁き世にやなれなん

毘尼薩台巖は一一歳で伏見深草の瑞光寺に入って僧となった。明治四二年八月一日歿、八一歳。景恒門下。

鶴全千年寿 森熊夫八十賀

(二九八) あしたづのあしとはしとのながかるに ちよのよはひやかねてこもれる

(二九九) ちよふべき君がよはひの友鶴と 声のどかにもまづよばふらん

森熊夫（直好伝二九一頁など参照）の八〇歳の賀歌は「香川景恒遺稿」の文久二年の項にも「鶴全千年寿森三折八十折」として収載されている。

緒方洪庵ぬしが追善に花といへる題にて

（三六八）心ありて散けんものかさくら花 君ををしむにかはらざりけり

緒方洪庵 文久三年六月一日歿、五四歳。

最後に、儀超宛の直好書翰（差出年月不明）があるので紹介しておく。

昨日被<sub>レ</sub>下候鯖至而美味なり。箱書ノ事、此間より申上候通、是だけハどうぞ外人ニ御頼可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。画も留置候。恐多ク候へ共、慥ニ返納仕候。御入手可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。祝御歌感心仕候。

。当月下旬ニは上林平人下坂いたすよし。貴下へも御尋可<sub>二</sub>申上<sub>一</sub>候。かしく。

十五日

儀超大雅丈

直好

受添

（多治比郎  
夫氏藏）

### 五 歌友追補

直好の歌友については、四〇人の名を列挙してその交遊状況を述べたが（直好伝三三四頁）、さらに幾人かを追加あるいは補訂しよう。

木村勇退（備中）

一七六三年—一八三五年  
宝曆三年—天保六年

備中国浅口郡玉島の廻船問屋。通称は五七、号は鉄笛道人、剃髪して勇退。

若年で大坂に出て、片山北海のち篠崎三島に漢学を学び、三島の養子小竹とは殊に親しかった。

四辻・西園寺・芝山の諸卿および桑名藩主松平侯は勇退の学風の壮快なるを喜んで挙用しようとしたが、辞して出仕しなかった。

篠崎小竹撰并書の一茶勇退居士墓碑銘（玉島柏島西山独照庵に所在）に「造一商船 多載古器物 到处貿易 東自

京坂 西至長崎 不憚風濤 往來如隣」とある。

天保六年十一月一三日歿、七三歳。

この勇退と直好との交遊に関しては、天保二年六月および年月不記の直好歌文（吉城真氏藏）がある。

我友勇退翁、ひとつの小管を得て、安藝守昌億の宿弥に示すに、やがて吹試ていへらく、其音のさやかなる事、大管（マツ）に増れりと。翁大によるこびて、承和の御門の古歌を思ひ、みづから細谷川と号し、予をして筒の表に此上句を書しむ。

翁はいとすこやかにして、国々所々めぐるをわざとせられたるに、此笛常にものせられんには、かの歌の一句を取かへて、吉備の翁の帯にせる□いはんも、また其義さやかなりといふべくや。

天保二年六月

平 直好

吉備の翁、境より出て、かの帯せる細谷川をとりもあへず、覺たらん楽のかぎり吹こゝろみてんとて、まづ管越調より始て、曲ごとに折返しふきもて行ほどに、一日ふた夜のうちに六の調を尽して八十餘ぞ吹をへたる。

翁年なゝそぢなゝつ、齒も大かた落たれど、其音たゆみなく、いさゝかのあやまちもあらでものせられたる。こもまたいにしへに稀なりといひつべくや。

二夜まで吹とほしたる笛竹に 千代のひびきも聞えける哉 直好

直好の記す勇退七十七歳は墓碑銘と齟齬するが、これは直好の誤記であろうか。

細谷川の笛名は、備中国宮内の吉備津神社のある鯉山の谷川の細谷川から採った名である。

真金吹く吉備の中山帯にせる 細谷川のおとのさやけさ （古今集巻第二十二）

西尾勝重（河内）一七八五年—一八五〇年  
天明五年—嘉永三年

河内国安宿部郡国分村（現在柏原市国分）の豪農。諱は勝重、通称は兵右衛門、号は松齋と言う。はじめ尾崎雅嘉に師事し、その歿後の天保二年秋に直好に入門した。

嘉永三年二月二十八日歿、六六歳。墓碑銘は並河鳳來の筆である。

家集に「辰の冬詠草」があり、編著に「天保三年辰のきさらぎ和歌詠草」がある。

直好との交遊については、本稿六七頁を参照されたい。

近藤芳樹（長門）一八〇一年—一八八〇年  
享和元年—明治三年

周防国吉敷郡台道村の農家田中氏に生れ、のち萩藩士近藤家を継いだ。字は子潜、通称は源次郎・晋一郎、号は寄居子庵と言う。

漢学を猪飼敬所・原古処に、国学を鈴木直道に学び、文政六年に京坂に遊学して後は、国学を本居大平、律令を山田以文、和歌を村田春門、医学を小串真佐に学び、「人を扱はず、一技一能と雖も悉くこれを取る」（寄居大平伝）の態度で智識を吸収した。従って、数次に及ぶ京坂修学中の国学・和歌についての交友を日記の中から拾ってみても、村

田春野・その子嘉言・浮田一蕙・穂井田忠友・花月庵鶴翁（田中屋新左衛門）・長田鶴夫（作五郎）・森熊夫・その妻貞子・高橋残夢・加納諸平・近藤光輔・岩崎美隆・中島広足・渡忠秋・佐々木春夫（万屋小兵衛）・大田垣蓮月

尼・尾崎夫夫・伊達千広・萩原広道など、その名を列举するに遑がない。

明治維新後は山口県庁に出仕して防長国郡志の編集に従事し、明治八年に宮内省に出仕し、皇学御用掛として学名が高かった。

明治一三年二月二十九日没、八〇歳。青山墓地に葬られた。

著書 標注令義解校本・標注職原抄校本・大祓執中抄・古風三昧考・寄居歌談

歌集 寄居歌集

直好との接触については、天保一一年七月二日に大坂滞留中の芳樹は「晴。熊谷直好が寓居ヲ訪ヒテ、ハジメテアフ」（近藤芳樹日記）と記している。夕陽丘に近い狐小路の直好寓居を訪れた芳樹は何を聞き何を談じたであろうか。両者の

対談については芳樹日記に何の記載もないが、この年正月に芳樹は森熊夫を訪れてその言霊説を聞いており、「言霊弁」の著書のある直好との間に言霊説についての応酬があったことは凡そ推測でき、「ハジメテアフ」と云う表現にも、かねてこの日を期してその所説をただしたい意図を持っていたことを示している。

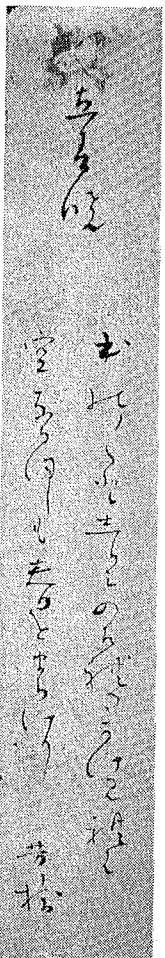
しかるに、天保一三年の「寄居歌談」（寄居歌談）（刊行弘化二年）の中で芳樹は、

熊谷直好は岩国の人なり。ゆゑありて難波にすめり。歌はよみくちなれど、さのみ心をいれず。つねに笛をのみむねとこのみてふきひびかしければ、その師なる香川の翁も、くちをしき事にいふとぞ。

と直好を厳しく批判しているので、両者の会談の結果は芳しいものではなかったことが推察せられる。「性、奇ヲ好ミ、行為常ニ人ヲ驚カス事多シ。蓋、世人ヲ輕蔑セルナリ。」（熊谷直好略伝）と云われる直好の狷介な性格が芳樹に不快の念を与えたのか、それとも直好の歌論は芳樹の充分納得するところではなかったのか、何れにもせよ直好に対する芳樹の印象は決して善かったとは云えないであろう。



直好が笛や琵琶の奏樂を好んだことは事実であって、天王寺の舞樂の時は伶人をも勤め、花園実章三位卿から琵琶の秘伝を授けてもいるが、そのために歌学をおろそかにしたというのは誤解である。直好の桂園社中における地位については「京都臨淵社相撲番付」に見られるとおりであるが、その歌学上の業績としても、天保一三年には、師景樹の著書「古今和歌集正義」を解説敷衍するために「古今集正義序註追考」をものし、天保一四年には「古今集正義総論補註」の稿を成して、直好の努力は倦むことなく続けられているのである。



近藤芳樹短冊

芳樹日記には、ついで天保一一年九月一日の条に、

熊谷直好がよめる弓場始のうた。

あたらしきははじめにかへり梓弓 君がちとせはもとすゑもなし

とある。この歌は、直好の家集「浦の汐貝」・「浦の汐貝拾遺」に収載されていないので、選集に入れられる程の秀歌ではないが、このころ何等かの事由によって、芳樹はこの直好の作歌を書き留めたのであろう。

なお、直好の作歌について、芳樹は「寄居歌談」の中で、

(直好)ある時、松間月を題にてよめる。

わが宿の松のこずゑにさはるとも しらでや月のそらにゆくらん

異しうはあらぬうたなるを、後に壬生集をみれば、

萩の花咲ちる露にやどるとも しらでや月の空にゆくらん

とあり。これと心も詞もまたく同じ。直好いかで古歌をかどはん。家隆卿のかくよみ給へるには、おもひも及ぼさざりしなるべし。おほかたおのが口もていはんとする事をば、いにしへ人すでにいへり。おのが手してかゝんとする事をば、いにしへの人すでにかけり。古しへの人におくれてうまれながら、いにしへの人にさきだたん事をねがふ、いといとかたきわざにもあるかな。

と云っていて、先の笛の愛好とは対蹻的に、直好の作歌を極めて好意的にも解している。和歌の道においては、やはり先達としての直好の力量を認めない訳にはゆかなかつたのである。

(拙稿「熊谷直好と近藤芳樹」山口県地方史研究第一五号)

松本通業 (大坂)

字は必大、名は通業、通称は寛五、号は石硯・醉古と言う。

伊予国の人であるが、大坂に出て淡路町に住み、医を業とした。

漢詩は藤沢東畝に学び、その主宰する先春吟社の社友であった。

通業がオランダ医学修業のため長崎に赴く際に詠んだ直好の長歌がある。

やまとにも 唐にもあらぬ くすり師の 道のおくかを求むとて むかふ所は いにしへの 三つの島根の  
外なれど みとせの内と 契りおく 限たがへず かへりこよ君 (浦の)

三井元孺 (大坂) 一七八八年—一八五〇年

天明八年—嘉永三年

大坂浄国寺町に住み、眼科医として名声のあった三井氏の第三元孺。名は元之、字は伯亨、通称は修徳、号は心齋・長港と云う。

嘉永三年四月二〇日歿、六三歳。夕陽丘浄春寺に墓がある。

(中野操「一医家名鑑」)

玄孺の有卦入の祝歌を直好が詠んだ。

今ぞかる底も深江のなゝふすげ おいかくれ笠ぬふ人のため (浦の汐 貝拾遺)

家系 三井眉山

良之、初代元孺 天明四年歿

— 棗州 善之、二代元孺 天保四年歿

— 心齋 元之、三代元孺 嘉永三年歿

— 孤鳳 宗之、四代元孺 明治八年歿

四代元孺(宗之)は直好の門人で、直好の家集「浦の汐貝」を編輯して、その序文を書いたことは「直好伝」に記述したとおりである。

上田光逸(周防) 一七八三年—一八五三年 天明三年—嘉永六年

周防国吉敷郡台道村の家農上田光陳(堂山)の養子。通称は五郎右衛門。大庄屋を勤めた。

詠歌・詠詩を好み、月次歌会も催している。妻の菊(琴風)・子の光美もまた和歌を嗜んだ。

嘉永六年正月二二日歿、七一歳。

家集 光逸翁詠草一卷

嘉永元年三月二八日に光逸は直好の寓居を訪れた。

熊谷直好、天王寺のあたりに寓居すると聞て訪らひしに、取次の女「留守なり」と告げれば、直に立て帰りぬ。

熊谷直好は岩国浪人にて、国書をよむものといふ。都会に出て其技をうまを売るに、敷台の見付に、短冊一枚

若干、色紙一枚これくと書付たるは、片腹いたくもかしこき仕業なり。 (東遊 紀行)

直好の歌名を聞いていた光逸は、東遊途次に狐小路の直好寓居を訪れたが不在であった。取次の女とは直好妻良子

であろう。短冊・色紙の揮毫料を式台に張り出していたのには、光逸は笑止とも賢明とも感じているが、いかにも直好らしく、とにかく人の意表に出た遣り方である。

平尾義本(撰津) 一七六四年—一八三七 宝暦四年—天保八年

撰津国池田の人。初名は西郷辨治郎。字は路卿、号は斫水。

天保八年歿、七四歳。

著書 国語考・雨夜燈 (慶長以來諸家著述目録)

直好との交渉については「熊谷直好翁點削斫水詠草」 (林田良平氏蔵、熊谷直好資料集第三册所収) があって、義本の詠草一五〇首に直好はそれぞれ添削を加え、「よく調候」「可然候」「よろし」などの評点を与えている。

上杉清憲(備後) 一七九二年—一八五七年 寛政四年—安政四年

備後国沼隈郡鞆浦の富商大坂屋の九代。家業は米酢の調製販売であり、代々平左衛門を称した。剃髪して閑鷗と号し、居室を対仙醉楼・望憐亭と称した。

和歌を好み、文政一二年三月二五日に景樹に入門した。 (門名入 門名簿)

安政四年九月三日歿、六六歳。法名は養性望憐居士。墓は勝音寺にある。

景樹および直好との関係を示すものとして、天保五年に景樹は、

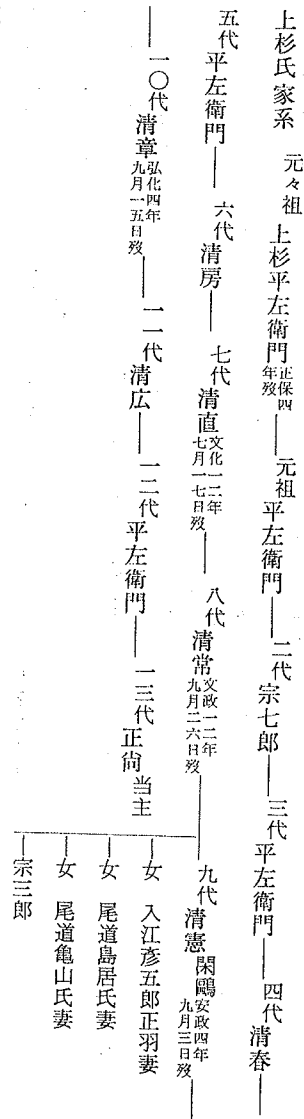
鞆の浦なる上杉清憲が対仙醉楼の歌乞けるに

武士のゆづらひくしまけふみれば 波のひびきも高ともものうら (桂園 遺稿)

と詠ひ、直好は、

対仙醉楼といふ家に宿りしに、海山の景色いふばかりなし

はじめての見たる心を知らせばや 宿のあるじを客人にして(浦の汐 貝拾遺)  
 と詠んでいる。なお直好には、  
 限りなき宿のためしにひく島の まつの数こそしられざりけれ(上杉家旧 蔵樓紙)  
 の歌もある。



山片重中 (大坂)

「熊谷直好等一座百首和歌」(熊谷直好資料集所収 碧沖海歌集第二十八輯)の中に重中作歌九首が収められていて、直好と親しい仲であること  
 は解るが、姓・生国・経歴など一切不明であったので、『熊谷直好伝』(三三九頁)では、あるいは岩国の神官名  
 越重中ではあるまいかと記したが、その後「如月軒詠藻」が管見に入り、この歌集中にしばしば山片重中(家号は  
 風音居)の名が現われ、直好と重中と平瀬儀超(如月軒)とは安政・文久の頃に大坂に於て親近しているので、如  
 月軒詠藻の中から重中に関連する事項を拾ってみよう。

安政六年正月「風揺白樫 風音居」(以下歌題のみを記し、儀超の作歌は省略する)・同月「雲雀 風音居兼題」・四月

二二日「米石郡代をいざなひまゐらせて住よしにまうづべしと、かねて山片重中・信利など、約しをき、暁より  
 舟にのらんといひしが云々」

安政七年正月「山片重中ぬしより睦月十三日文して、俄やどり住あふためし今年より昔にかへる春は来ぬらん、と  
 有」・二月「山片重中吾棋会にはこで、あけつる朝、早蕨を籠に入れて、近在へまかりて得こずとことほりたる」・  
 四月「庭上松春久 山片氏會兼題」(註、香川景恒遺稿に四月一五日大坂山片風音居の兼題としてこの題詠がある)  
 ・八月「重中ぬし、むかし豊後の国人に萩の花の根をわけて恵まれたるが、ことしたよりありて、其花いよく  
 生榮ふとて、たにざくにうつしておくられたるをまた恵まれたるに」・同月「重中より文して、きのふ服部辺に  
 てひろひ帰しとて、松露を恵みて歌有」

文久元年正月「風音居初會兼題鶯告春」

文久二年正月「若水 風音居正月題懷紙」

元治元年正月「春來鶯遲 風音居初會」(註、香川景恒遺稿に正月一日風音居兼題とある)  
 毎月一日が山片家(風音居)の月次歌会であったことが解る。

氷室長翁(尾張)一七八四年—一八六三年 尾張国海部郡津島村津島神社宮司で景樹門下である氷室長翁については、『直  
 好伝』(三三五頁)に記述したが、その後長翁宛直好書翰が知見に入ったので紹介する。

御登坂之節ハ久々ニてゆるゆると御面談いたし、大慶不<sub>レ</sub>斜候。御歸り之ふしも失敬、御旅宿へ罷出候へバ、は  
 や御発途あとにて十日の菊、御ゆるし可<sub>レ</sub>給候。

此たび先師撰しおかれたる門人うたども御上木御催し之趣伝承候。翁も地下にてさぞ大悦之事と奉<sub>レ</sub>存候。  
 近比野子うためきたるはとんと無<sub>レ</sub>之恥入申候。

來春花のころハ又々御上京、今よりまち入申候。

何も爾來御無沙汰御断りまで。時季御自愛專一二存候。

加茂まつりのうた

けふことにかくるもろ葉は諸ともニ 神につかふるしるし也けり

御赦之うた

あなすずしまつりかふらし千早振 糺のもりの秋のはつかぜ

これはこのほど被<sup>レ</sup>頼うめき申候。

九月廿日

直好

長翁様

拜

貴下

（某氏藏）

文中に「此たび先師撰しおかれたる云々」は、景樹撰集の桂門歌人の歌集に長翁がさらに補撰して出版した「桂花餘香」のことである。この歌集の出版は弘化三年から嘉永年間にかけてのことと推定されるので、本書翰はそれに先立つ弘化年間の差出し、すなわち直好晩年の書翰である。

#### 六 備後国尾道の桂園派歌人と直好

尾道における桂園派歌人および彼等と関連のある人たちには、熊谷正邦・土屋正文・聞戒法師・伊沢惟節・武本典則・伴川一清らがあり、これらの人びとに関する何等かの史料を得たいと、尾道短期大学青木茂教授や尾道市史編集

室に手掛りを求めたが、現在のところ未だ適確な史料が得られないので、小文においては熊谷直好日記・木下幸文日記によって尾道桂園派の動向を記すこととする。

既刊『熊谷直好資料集』および『熊谷直好伝』に直好の文政一二年正月二三日付正邦宛書翰を収載して、この正邦は京都の西村正邦ではなくて、尾道の正邦であろうと推考した。その後、木下幸文日記を披見しているうちに、正邦は尾道の熊谷正邦であることが確認できた。

幸文日記の文化九年二月二七日の条に、幸文は舟で尾道に渡り、「先熊谷ぬしのもとにおちつきて、ゆあみ、物くひなどして、夕くれ挹翠園にうつりぬ。」とあり、三月三日「正邦ぬしのもとより、おさな子の初の節句とてよびにきつ」とあり、続いて五日・六日・七日・八月一日にそれぞれ正邦と来往のことが記されており、文化一二年四月一日には、「嚴島詣では花の頃過ぎと早く家を出たちたりしかど、……尾道の旅寝のほどに春もくれぬ。さらばよし、時鳥をこそとて思ひ立つに、いざなはるる人々は土屋正文・熊谷正邦・聞戒法師なり。」の記事があって、ここに初めて尾道人熊谷正邦の姓名が浮かび上ってくる。更に文化一四年八月五日、「尾道人熊谷正邦・武本典則・伊沢惟節出きたりて、ここにやどりす。」と明記される。

熊谷家は備後国尾道の後地村（現在尾道市久保町の東部）に居住し、屋号を金屋と称する豪家であった。代々幾右衛門を襲名して、御調郡内の割庄屋（大庄屋）を勤めた。千光寺山麓に別荘挹翠園を構え、頼山陽・田能村竹田らの文人を迎えることしばしばであった。

文政二年八月二四日、京都から岩国帰路の熊谷直好は尾道に立ち寄り、「かねて契りあれば正邦ぬしをとふ」とあるので、在京の時から正邦往訪を約束していたことが知られる。しかし折悪しく正邦は伊予国松山に出掛けていた。まつ山はたのものげなる名なれども 我を隔つる所なりけり 直好

正邦の家を長江舎と云い、不在中の正邦に代わって正備・正種・広らが「いとねんごろにいたはり聞え給ひ」、二日間滞在中に直好は広の詠草に対して、

式しまの大和うた鳥きてみれば 君は言葉の玉ぞかゞやく  
と奥書した。

註 熊谷正備 文化九年三月一五日の幸文日記に「正ともぬしの刀自」の記事があり、同二六日に「正備ぬし伊勢詣です」とある。正邦・正備・正種・広の関係は未詳。

直好は二五日に干光寺で土屋正文と会い、正文が近くの梅林に「春のゆき、には必ず立より給へ」と誘ひ、歌の贈答をおこなった。

うめよりも先またるゝは梓弓 春はといひし君にざりける

正文

うめよりも松をしるべにとひよらん 春をもまたば久しかるべし

直好

註 文政一二年正月二三日付熊谷正邦宛熊谷直好書翰を再録する。

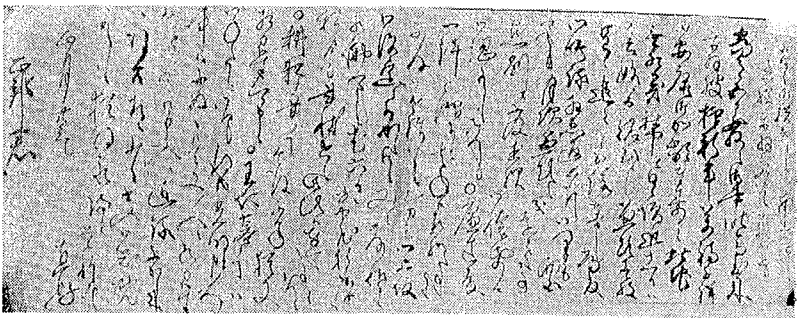
尙々御祝儀として南(鐙) 壹片御恵投忝拝受仕候。御礼申上候。

当月五日発之御書昨今到来、忝拜披。抑新年万福千祥、御安康御加齡奉<sub>レ</sub>寿候。

此地無<sub>二</sub>相異<sub>一</sub>、社中も日々増進、十一日ハ会始<sub>二</sub>而賑<sub>一</sub>申候。兼題壹枚呈候。追々御出詠奉<sub>レ</sub>希候。当度御吟詠拜点返進致候。いづれも面白承候。月次兼題之義、遠方之事、点削<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>及<sub>一</sub>直様御懷紙江御認可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下奉<sub>レ</sub>存候。

。廉達殿一件被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>候。去年は左様之事とも不<sub>レ</sub>存御世話仕候。シカシ御上坂御治定<sub>二</sub>相成候<sub>一</sub>ハ、又々如何様ニも相働可<sub>レ</sub>申候。尤六日ニ米屋新兵衛よりも私よりも書状遣候。此頃ハ違候事と存候。

。耕耘ノ書ノ事、其後不<sub>レ</sub>承、猶又相尋可<sub>レ</sub>申候。



熊谷正邦宛熊谷直好書翰 (正文車蔵)

。王仁墓ノ事ハ承候事ニ御座候得共、光明と申人の事ハ不<sub>レ</sub>存候。是又人ニ相尋、あとより可<sub>二</sub>申入<sub>一</sub>候。

近詠不出来に候得共、左え少々書入御笑覽可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。猶期<sub>二</sub>永陽<sub>一</sub>候。恐々謹言。

正月廿三日

直好

正邦君

御机下

元旦に あたらしき年の始にいかなれば ふる郷人の恋しかるらん  
二日立春也。此地魚市ノ初日也。

大伴のみつのあびきの初市に 春さへけさは立にける哉

家の初会。初春見鶴 万代の春や立ちらん朝日かけ にほへる空にたづぞ鳴なる  
野子日 君が代の子日せよとやなれるらん かねてものべは果なかりけり

遠山霞 遙にも有馬のたけぞかすむなる いでゆの煙たちやそふらん

田柳 青柳のみどりも深く成にけり いまやかへさんふるの小山田

河柳 つな手引よどの川舟こと、はん そめかけたりや青柳のいと

朝鶯 我その、梅の梢にやどりけん あくるもまたぬ鶯の声

夕霞 けふも又ゆふべになりぬ淡路しま まつほのうらに霞棚引

梅薫風 いろかへぬ常磐の山の松風も 梅の匂ひにかすむころ哉

片岡のあしたの原の春風に 昔恋しき梅がかぞする

(正宗文庫蔵)

以上のように、直好・幸文は尾道に熊谷正邦を訪れること数度であり、また尾道歌人たちと歌の応酬を重ねているので、直好伝補遺のために如上の歌人たちについての幸文日記の記述を続けよう。

土屋正文については、幸文日記文化九年三月五日の条に、「助宜・正文・一清・正邦のぬしたち、はからず出きませり。」とあるのが初見であって、正邦の別荘挹翠園に滞在中の幸文を訪れた正文は、三月七日「正文・正邦などきませり」、四月一日「正文ぬし・聞戒法師など、わかちよめる法樂の歌三十首」と交遊が重ねられている。七月三日「土屋正文ぬしは母のおもひにてかきこもりたり。」と母の喪に服したことも記されている。

文化一二年四月一日、幸文は「嚴島詣では……さらばよし時鳥をこそとて思ひ立つに、いざなはるゝ人々は土屋正文・熊谷正邦・聞戒法師なり。梅園(村田)春翁・植田方清などは我跡を追ひて来つる人々なれば、もとより呑むべうもあらず。」と記し、この一行は四月一日に尾道を舟出して、一四日に嚴島神社に参詣し、彌山に登り、一六日に広島に赴いてこの地の歌人たちと会合し、二一日に幸文ひとりを広島に残して舟で尾道に帰着した。幸文に贈る正文の歌がある。

君をおきてゆくだにあるを雨ふりて いとゞ侘しきこの舟出哉

文政二年八月二五日に直好が干光寺で正文と会ったことは既述のとおりである。

文政三年五月六日、幸文日記に「尾道なる土屋正文のあつらへにてかける萩のこと葉」がある。

をよびをりかきかぞへけん七種の花はしもとりぐなるが中に、萩をあきといひ、尾花を秋といひけん、人の心のさまぐなるこそおかしけれ。萩といふものよ、これが撰びにはおくれたれど、先さきつばかり長雨のころ、

やうく高らかに立のびたるに、降かゝるしづくども玉とぬきもたされたる、又みな月のつごもり、秋風のしのびく打吹たるに、空行螢のこれがぞよめききつけがほに、ふと飛かゝりたるなどおかし。まいて独ある人のいねがてなるよひ、あかつきわすれてはくる人の音かとおどろき、ともすればむらさめの音かとうたがふなど、秋のあはれはたゞ此ものうへこそあれ。虫のねあるかなきかに、大かた霜かれわたれる草むらのあたりに、おほどれたる穂のうち動きたるも、猶ぞる身にしてみておほゆかし。土屋ぬし、前栽の木草おほかる中に、これをしもとりあげて、萩園と名づけられたるは、かのものよりことにはあはれる心ばへをふかく思ひしめたるなるべしと思へば

大かたの世の耳にだに萩のはの 風をばたゞの音とやはきく

聞戒法師については、文化九年三月一〇日、挹翠園滞在中の幸文を訪れて花の歌を詠み交わしたことが先ず知られる。

とぶらひて又こん時は散りたらん さくらの花はさかりすぎたり 聞戒

さくらこそ散も過なめ山吹の 花のさかりは過ぎざらん 幸文

三月二四日・二八日・四月一日・六月一日と同じく幸文を訪れ、次いで六月八日「聞戒法師俄に立ちて都へ上りにけり。このついでに大和の圍ち残りなく見巡らんと云はれしは、早くよりの志なるべし」、七月八日「聞戒法師は大和の名所見巡らんとて出たゝれしが、京に至りてのち、俄に引かへて東のかたに遊びけり。みな月の末までにはおそくとも帰りこんと云ひおこせたる」、一二月一日「聞戒法師の東日記の末に」とは幸文日記の記すところである。

文化一二年四月一日、幸文・正邦・正文らと共に嚴島参詣に前かけたことは、正文の項に記したとおりである。伊沢惟節についての初見は、文化二年六月三日、備後国鞆浦で保命酒本舗中村家に滞在中の幸文を訪れ、「あるじ

の家にかめる酒いださせて、かたみにすゝめつゝ、樂をはじめ。早川翁は箏、高戸君は横笛、伊沢ぬしは簫の笛にて青海波をなん吹きける。」

名ぐはしき鞆の浦わの浦波に ものゝ音そへてきゝしけふかな 幸文  
の記事である。

次いで文化九年八月一日、幸文・正邦・正ゆきらと向島の照高の家に遊び、二月一日、玉島の柘榴園に滞在中の幸文を「尾道より舟にて」訪れ、さらに文化一四年八月一日には、糸崎に滞在中の幸文を正邦・武本典則と訪れている。武本典則については、文化一二年四月一日に幸文・正文・正邦・聞戒らと尾道から舟出して嚴島神社に参詣したこと、文化一四年八月一日に糸崎滞在中の幸文を訪れて四日まで逗留したことは前記のとおりである。九月一日には幸文が典則家を訪れて一泊している。

伴川一清については、文化九年三月五日に正邦・正文らと幸文を抱翠園に訪れ、六月二日の頃は重病に悩んでいたことが幸文日記に見える。

そのほか、「正ゆき」「向島の照高」については詳細不明である。

なお、幸文日記の文化八年一月一九日の条に、正邦家に滞在中の幸文を海福寺湛応が訪れ、二一日に蕎麦に副えて一首を贈ったことが見える。

あひみずば有ともしらじわかのうら なみくならぬ玉の光も 湛応

湛応は尾道土堂町の時宗海福寺二代住職で、弘化二年八月四日に尾道久保町の時宗尾陽山常称寺(願王院)で歿した。享年不明。法諡は桂光院其阿上人湛応老和尚。(海福寺および常称寺墓碑による)

七 熊谷直好添削中村政蕃詠草

備後国鞆浦の富商保命酒屋中村家の代々当主は文雅を愛し、菅茶山・頼山陽・中島棕隠らの文人墨客を迎えることしばしばであったが、桂園派歌人との交渉はことに密接である。

中村家七代吉兵衛政憲(享和三年一八四九年)が文政一一年(一八二八)夏に上京し、景樹に就いて「歌学修行」したことは、文政一二年二月二四日付政憲弟政顕手控に「香川宗匠様(註、長門介景樹) 江愚兄(註、永三郎・自好庵政憲) 厄介二相成へ御挨拶……鶏卵五十、菊酒五合箱入壺差登候。」(中村家手控)とあることにも見られ、政憲末弟九代吉兵衛政蕃(文化三年一八七七年)も文政一〇年(一八二七)に二三歳で景樹に入門した。それは、文政一〇年一月二三日付中村政顕(政憲弟・政蕃兄)宛香川景樹書翰に「御舎弟様御入門」とあることによつて知ることが出来る。

この政蕃に詠草三冊が残されている(中村胞)。第三冊の表紙に「午霜月五日 政蕃上」とあり、奥書に「こは午仲秋 熊谷直好の加筆也」とあるので、天保五甲午年(一八三四)政蕃二九歳の時の詠草である。直好による歌学指導の実例を知るためにここに収録する。

一番 正蕃上  
詠草

社頭冬月 へ千はやふる神のいかきにさえさえて ちりもくもらぬ冬夜月

神無月かみのいまさぬみやしろに なほかけすみ残るき夜半の月かな  
橋霜 あかつきの月かけかすみしら河の しろくもみゆるはしの霜かな

旅人の袖寒からし白たへに 霜さえわたる木曾のかけはし

時雨 へ朝なにけにもろくちり行紅葉を 打なみたしても降しくれかな

朝とくおきて へ庭とりの声つけにしらみみてあくるよに おくれてひく鐘の音かな  
月をみて へいよの山雪ふきおるす夜あらしに いよいよさゆる月のかけかな

へもしほたくあまのふせやの苦の上に 霜かとみえてさゆる月かな

へ松のまのすきもる月のかけにさえ へわたりたるねやのうちかな

へ風さゆるみなと入江のつきかけに うかれて遊ふ人もありけり  
雪のはしめて降けるあした へ風さむみ空にあやしき雲みえて けふめつらしく雪を降ける

閑路雪 もる人もみえずなりけりあふさかの せき路はおして雪のふれれば

ある夜月をみて へ雪のこと空行くものさえさえて ちるかとおもふ月のかけかな  
雪のいたく降ける夜よめる へ白たへの雪にうつみし高ねより 洩くる月のかけの寒けさ

へ今のまにおふへる雲の影さへて 月さしわたる雪のうえかな

除夜 くれにけるとしはおしまて今のまに 立こむ春そいやまたれける

春立けるあした おのつから端はにおふる松か枝に 吹くる風や春のはつかせ

軒端の松とはいふへし 軒端に生るとはいはれず 軒端に生るは吾かなふへし

へぬは玉のひとよをとしのかきりにて けさはのとけきまつのはつ風  
春立といふ日、かめにさしたる梅のひとつふたつ咲けるをみて

へおりよくも咲そめにけりうめのはな 今こむ春をかさしてまたむ

む月十四日福山より帰る道にて へきへのこる川辺の雪とみえつるは 一むらさきのおさるなりけり

夕つくひさすすのいけの水のおもに 魚はむさきのおもしろきかな

早春松 春來ぬとまたきにかすむいよのやま 雪間にまつはあらはれにけり

へ春霞立こめしより山まつのかはらぬ色ものとけかりけり

さしわたる朝日のかげののとけさに 松のみとりも春めきにけり

へうこきなき岩ねのまつは打よする なみにも春の色そみえける

ぬは玉のよるのあらしの吹やみて 松に音なき今朝のはつ春

あつさ弓春のはつ風吹からに まつのみとりの色まさりけり

御歌我物にて甚よろしく候 此心はへを失はすおしたて給ふへし

中村政蕃上

詠草



葉月十六日夜、對潮樓に登りて月の出けるに程なく曇りければよめる

〓山の端にいさよふかけをみしほとそ こよひの月のかきりなりける

〓曳しまのおきへにたてるいその松 月出てこそみえそめにけれ

おなしく十八日夜雨降けるに人々と諸にまた對潮樓にあそひて

〓引しまのしまねもみえぬあめの夜に いさり火のみは焚まさりける

月かけは雲井にのみそてりまさめ 雨になりたる夜半のさひしさ

廿二日の夜月をみて 更る夜にひとりおきてもみつるかな なかは過ゆくありあけの月

おなし末つかた砧をきゝて 〓月もなき空にきこゆる小夜きぬた ほか火のかけに打あかすらむ

またある夜よめる 〓曳しまの山の端たかくつきいて、いそつたふふねあらわれにけり

十三夜月 中頃の月にひかりはかわらねと 風みにしみてころもうつなり

重陽宴 〓露なからさけにひたして菊の花 千世のしづくを汲へかりけり

九月十七日水島村えまかりける道にて みのしまをむかふにみつ、我くれは 雲吹はらふともものうらなみ

また風なき空もおたやかなりければ 秋の日もとかにてれば山かけに きしなかぬかとおもほゆるかな

おなし村の躑躅館にあそひて 瀧の音をまつ聞からにやま里の けしきなしたるやとの庭かな

また夕つかた 〓秋の日をなとてか諸におしみけむ くれは月になりたる物を

〓秋の野、片岡のむしの音きけはひさかたの 月に声あるこゝちこそすれ

山まつをはなれしよりは月影に ちりはかりなるくまもなきかな

有明のかけとおもへどなかつきの ふけゆく月をおしみけるかな

〓今た、おもふことなき光かな まつかえたかく月ははなれて

神無月中頃月をみて 爰にさへ月はくまなく照しきぬ 紅葉は木々にあともとゝめて

散しける紅葉か上に月てれば あはれいろこきにしきなりけり

おなし十四日霰降けるに 里の子かそともにさわく声よりも さやかにひく玉あられかな

おなし十五日朝高野山古岳法師尋き給ひ何かと物かたりしけるに、絶す歌よめなとゝすゝめ給ひけるに

高野山わけたりつゝしき島の 路つたへなむきみそうれしき

また高野山幽居十勝の□よめとありけるに

十勝

庭梅 庭ものも雪に道なきふるさととは むめのにほひそまつかよひける

昼竹 おのかまゝに生いてし竹の葉をしけみ 昼のうちくらくなりける哉

掛月 遙なる空にとおもひさしいて、 月もやすらふみねの松はら

牡丹 山ふかくかくれしひとのいかなれば 心にも似ぬはなのいろかな

〓世にとふき高野、おくに移し植し やまふかみくさみる人もなし

紅葉〓秋ふかみ日々にしくる、深山辺は そむるもはやき木々の紅葉

鹿鳴 しのひ音に妻こふしかの声すなり 高野、おくの秋のよなく

泉聴 世の人のかけはうつさぬたかの山 いはまの水のおとのさやけさ

杜鵑 おのかすむ山ちかゝらしなれくゝて きかぬ夜半なき山ほとゝきす

熊谷直好伝補遺 (兼清)

六九

積雪<sup>お</sup>世の人のを<sup>お</sup>とつれのみかまつ風も たえてきこへぬけふの大<sup>故</sup>雪  
雲山<sup>お</sup>高野山おなしけしきをみせぬこそ たちまふ雲のあれはなりけれ  
泉聴<sup>お</sup>松かせは絶てきこえぬねさめにも なほすみまさる山みつの音<sup>かな</sup>

ある夜探題 寄夢恋 きみをしもしたふ心はぬはたまの 夢となりてやおもひますらむ  
霜月三日朝とく雪の降けるに 夢<sup>うへこそ</sup>さめてあさいの床のさむかりし かくこそ雪はふりけるものを

梅の絵に月のほりたるに へうめのはな木<sup>映しす</sup>かけによりて月みれば 梢<sup>影</sup>もにほふこちこそすれ  
如月初つかた雪降ければ 松<sup>こ</sup>のうえにしはしは雪<sup>五</sup>の降つみて ふゆ<sup>二再や三</sup>きさらきのかせのさむけさ

斐雄ぬしの<sup>道</sup>遂善 懐旧涙 へむさしの露はなみたとおきかへて はてなき人をおもふころかな  
水辺柳 青柳のかけのうつりてゆくみつは みなそこまでも春やしるらむ

梅薰袖 梅<sup>一</sup>のはなふかきに<sup>三</sup>ほひは<sup>二</sup>わか袖<sup>五</sup>に<sup>四</sup> つゝむにあまる心地こそすれ  
寄風恋 柴の戸をしはくたゝく夕風に ものおもひするこひもするかな

弥生五日雁の渡をきつゝ へきのふけふのとかなる日をまちつけて 雁もこし地におもひ立らむ  
おなし末つかた朝宗亭の花をみて おのつから散にはあらしさくら花 夕風たちてさそふなりけり

何により春<sup>を</sup>とやいはむ<sup>と</sup>このやとの はなにさへこそうとく<sup>つろひ</sup>なりけれ  
春風のまに<sup>く</sup>さそふ糸<sup>さ</sup>くら なひくとすれとちりもこそすれ

同廿四日明圓寺会当座 暮春花 へ木の元に春もかへるかさくらはな さそわぬ風に散みたれつゝ  
また山寺にのほり花をみて へ人の世<sup>中の</sup>のはるにやもれし山寺の にわのさくらはさかりなりけり

へ山高みふかき震につゝまれて ちらむともせぬはなのいろかな

物おもふ事ありける頃よめる へうき事はかねてある世にうまれきて 身を今更になけきつるかな  
わかみさえわ<sup>へ</sup>か心にはまかせぬに 世をも人をもなにか恨みむ

四月はしめの頃朝宗亭の花をみて人々と<sup>さ</sup>諸によめる  
へ人はみな衣かへするなつなれと ちり<sup>さ</sup>おくれたる花のあはれさ

人の許に短冊掛をおくりけるに、其うらに歌よみて遣しける  
月に花に雪のあしたのまとひには ことの葉くさの種にそありける

塵露上人たつね来給ひけるに 菅座 林蟬  
かた岡の松のはやしは高けれと ちかくきこゆるせみの声かな

へ鳴せみの声のはやしとなりけり 路の行手のまつむらたち  
点取五題

雨中早苗 池水はそのまゝおきてをやまたは あめのうちにと早苗とるなり  
窓前螢 へ呉竹の葉す<sup>あ</sup>への露をしたひきて まとにさややくとふほたる哉

軒橘 軒ちかき花たちはなのこのもとに はしねしてまつ山ほととぎす  
契来世恋 世をかへてちきる心になりしより こひ<sup>け</sup>のいのちはおしまさりけり

芦間鶴 棹さしてあしまをつたふ海士舟の ところかへてもあそふたつかな  
水無月六日御社に詣ける路にて へ夕立のはれたるのちに降あめは 山<sup>ま</sup>つつかえみあくるまつ<sup>の</sup>しつくなりけり

文月十六日の夜月の出るをみて 大空ははれたるものをやまの端の 雲にたたよふ月のかげかな  
さらしてしすしき月を待つて 砌のまつに風たちぬめり

熊谷直好伝補遺 (兼清)

熊谷直好伝補遺 (兼清)

熊谷直好伝補遺 (兼清)

熊谷直好伝補遺 (兼清)

熊谷直好伝補遺 (兼清)

熊谷直好伝補遺 (兼清)

熊谷直好伝補遺 (兼清)

熊谷直好伝補遺 (兼清)

熊谷直好伝補遺 (兼清)

熊谷直好伝補遺 (兼清)

熊谷直好伝補遺 (兼清)

熊谷直好伝補遺 (兼清)

熊谷直好伝補遺 (兼清)

熊谷直好伝補遺 (兼清)



午霜月五日

政蕃上

詠草

師走 みそかのよ御社に詣てよめる へ夜れとなから雪はとしみえぬくれないの うめの木影そは春心するちせり

驚馴 へうくひすのはつ音よりしてあさなく ききももらさぬ谷かけの庵

思恋 へ逢れとみてもいひ出かねつひたすらに おもひのみする恋もするかな

松残雪 へ伊よかねは松の玉ゆきとけかたみ とけぬなからに霞み棚引

氷解 へ驚のはつねもらせし今朝よりみれば かけひのこほりとけそめにけり

日のあしのけたらぬ谷のあつこほり とくるや春のいたるなるらむ

山呼万歳声といふ語床の掛地にありけるを人々と諸に題にしてよみける

へ名に高き亀の尾山の万代は 松のあらしのよはふ也けり よろしく候

海邊霞 へ沖つなみ空もひとつにうち霞み 帆かけきへゆく干船ももふね

祖父の世にいませし時、ちさき山松を手つからうつしきて、砌にうえられけるに、今はいと生茂り、みあくるはかりになりけるに、こたひととせあまり七年のめぐりに御前へ歌奉るとよめる

へ君か手にうまへし昔の山まつも えたたるるまてなりにける哉

へいとけなきそのをりながら倅を わすれかねては涙こぼるる

如月中頃上杉うしのつとひ 当座 春草短

へわか岡のまつはかすみてみゆれとも 垣ねのなすな土もはなれす 結句めつらし

松にわらひ書たる へかた岡の小まつか原にもえ出で 千世をかそえてふるさわらひやこれ

東都なる花庵ぬしの、こたひはしめて尋きこし給ひけるに、十日あまりととまりて、水無月朔日出立給ふわかれにのそみて、東都人なれば、また逢ふ事もいとかたしなととかこち給ひけるに、磯邊におくりてよめる

引しほはやかてみちこむ我浦に わかれてあはぬ契りなるへき 少聞とりかたし

芋の葉のいとなかなかしく竹にまつひたるをみてよめる

へ芋かつらからみからみて呉竹の 葉わたるかせの音せさりけり

つとめて起けるあしたよめる へわか竹の葉すへのほる白露を たまたまみつるけさの涼しさ

七夕の別といふ事を へおもひやれ天の河なみ立かへり またこむあきと契るころを

七夕の夜よめる たなはたの逢ふ瀬のなみも静かにて □はうれしき秋にそありける

文月十日のよ月をみて へうちはれて水のいろなる大空に なかるる月の影のすすしさ

御社に詣てよめる へはふり子か打舞ふ袖のうらみえて 初秋かせは吹わたりけり

文月廿二日おさな子の一めぐりに御はかにもふてて

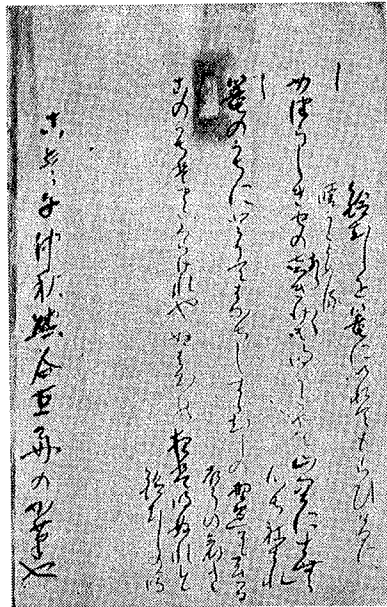
かなし子の露ときへにし野邊に来て まつ秋風を恨みそめけり

熊谷直好伝補遺 (兼清)

松虫 へすみそめの夕風たちて打まねく 尾花かもとに松むしの鳴

よし

朝早く御社に詣てよめる へ松しけり杉のふるはの枝くみて 実にみやしろは神さひにけり  
紅の朝顔を繪にかける扇に へさしのほる日影うはひて咲にけり 色くれなゐの朝かほの花  
葉月八日のよ月をみて へ夕月の光りよりしてくまもなし この中頃の影そまたるる  
この頃は草むらよりも吹たてて 最中の月を松むしの声



中村政蕃詠草 末尾

鈴むしを籠にいてれもらひたる眺かたよめる

へめつらしき虫の音きけは明かたは 山里にすむ心ち社すれ

へ籠のうちにとりてはなちしすむしの 野邊にもまさる声の哀さ

へこのうちはまたくられやぬは玉の 夜は明ぬれと鈴むしの鳴

こは午仲秋熊谷直好の加筆也

八 香川景樹離縁後の菅沼斐雄梅月堂養子縁組の交渉

文化元年に景樹が梅月堂香川景柄家を離縁となり、その後において香川梅月堂の扶持問題に関して景樹門人河面蔵人(河野重就)が岩国藩に來訴し、この梅月堂繼承に関する紛争は遂に直好の岩国脱藩にまで波及した経緯、および景樹離縁後に、文化一三年に佐々木景欽が梅月堂養子となったが、文政四年にこれも離縁となり、同年秋に伏田景礼(景嗣)が梅月堂跡目を継いだことは、『熊谷直好伝』(一七三—一九四頁)に記したところである。

その後、昭和四六年七月の倉敷市長尾の小野招月亭の史料調査において、香川景柄および菅沼綾雄の書翰数通を採集することができて、景樹離縁後の梅月堂繼承についての新知見が得られ、香川梅月堂の繼承については複雑きわまりない事情が伏在することが了解できた。これはひとり香川梅月堂自体の問題に留まらず、直好の公的・私的な進退に係る微妙な問題であるので、直好伝補遺の意味において紹介することとする。

小野招月亭において採集の書翰七通は本稿の末尾に収載したとおりであるが、この書翰に基いて菅沼斐雄養子縁組の交渉の経緯について見ることとする。

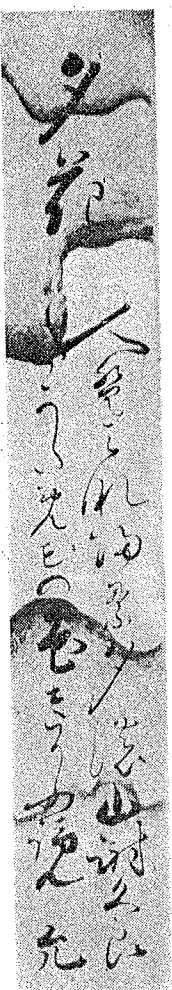
史料一に、「拙家養子之儀申上候処、被<sub>レ</sub>掛<sub>三</sub>御心頭、御聞合被<sub>レ</sub>下辱奉<sub>レ</sub>存候」とあるように、文化元年四月に景

樹離縁の後に、景柄は諸方に養子候補者の人選を依頼し、福武右近からは「吉濱北村六郎次と申人之男二十歳」の推薦を受けた。

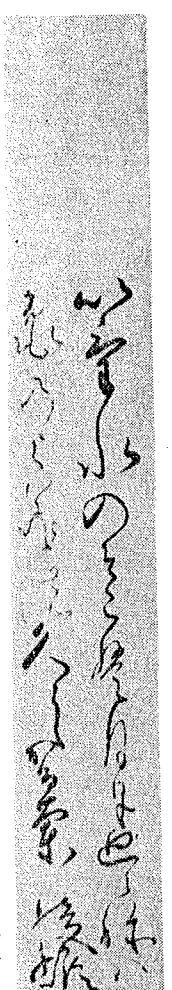
福武右近(一七五三年—一八三三年)は備中浅口郡玉島の人で、通称は右近、名は允まこと、字は士猷、号は恕齋と言う。儒学を西山拙斎に、和歌を西園寺賞季に学び、西園寺家近習頭兼奏者を勤め、景柄とは親交があった。



香川景柄 短冊



福武右近 短冊



北村綾雄 短冊

右近の推薦する人物は、備中国小田郡吉浜村の庄屋北村六郎次まさちか賢親の長男綾雄(一七八六年—一八三四年)で、文化二年に二〇歳である。京都や伊勢国藤堂家家老次男や同国桑名家老末子、そのほか白川侯家中や近江国八幡の人、京都近在の郷士など候補者は多数に上った中から、景柄は右近の推薦する「才器も有之、美質、人品も御見及」の斐雄を最良の養子候補者と内定した。

問題は梅月堂の借財返済の方法にかかっていた。梅月堂の歳入は「岩国吉川家より年々銀二貫目餘、米十五俵」であり、歌学宗匠として出仕する徳大寺家からは「何も頂戴は不仕」であった。その上「大炊御門様損金以來、長門介(景樹)入家後、同人事にも餘程無益之費」があつて、「当時四百金斗借財」があり、この借財を弁済できるだけの持参金を携えた養子が必要としていた。従つて、人物においては最適と思われる綾雄も「四百金の処、当時持参出来候」が最高であり、さもなくば「当時百金ニ而も貳百金に而も携、其餘追々ニ被贈」か、それとも「当時何程、年々何程付候こと歟」と要求されている。

文化二年五月二七日付の前記書翰に続いて、同年六月一六日付の史料二においては、四百金の借財の他に、「即時少しハ無御座候而ハ居宅等の取締も出来かね候。永く借宅にても不安」と居宅の修繕費あるいは借家を引き払つて自宅の購入費までも入用とされている。

史料三の同年閏八月二七日付書翰では、借家の問題は「社中より借候而引移候様被申」で、東本願寺寺内袋町に移転して解決したが、史料四の同年九月三日付書翰では、肝心の綾雄が病床に臥し、「格外之事ニ無之候ハ、於京師治療いたし、可然道も候半歟」と上洛治療を要請される状態となつた。史料五の同年一〇月二一日付書翰においても、「北村病氣とんと本復成がたき趣」を聞いた景柄は、「此方も大半ハ夫々心中定置候故甚残念存候。」と落

胆する状況であった。

北村綾雄はその後文化三、四年の頃に病状が回復し、右近の斡旋によって上京して閑院宮中奥に出仕し、出仕するに当っては大坂城主菅沼武八郎の養子と名乗った。すなわち史料六においては菅沼此面布慈と署名している。此面このもは閑院宮家出仕後の通称で頼母たのもとも言い、名の綾雄はのち斐雄と改めたが、布慈の字はこの書翰においてのみ見られる。日付の七月一九日は何年のそれであろうか。六月二八日に吉浜から乗船して七月三日に大坂に着き、四日に「帰京」しているの、この時までに既に京都に居を構え、閑院宮家に「出勤」していたことが知られる。文化四年に京都に居た木下幸文は、その「朝三日記」の同年八月一五日の条に、「綾雄ぬしをいざなひて下河原わたりあるきて」と記している、文化四年に綾雄も在京していたことが解るので、この書翰は一応文化四年の七月一九日のそれであると推定しておく。

この史料六において注目されるのは、「御賢兄様よりたのみの儀、早速養父景柄へ申聞候所、甚満足仕」とある一条である。「菅沼此面布慈」が何故に香川景柄を「養父」と言うのであろうか。

管見に入った史料の限りにおいては、綾雄の梅月堂入家を示す確実な証左は何もない。史料六において綾雄が一方的に景柄を養父と言っているだけである。文化五年の幸文の「五十狭良井日記」七月一九日の条にも「北村綾雄ぬしきませり」と旧姓のままに記されている。従って、綾雄の梅月堂入家の交渉は確におこなわれたが、正式には成立せず、何等かの理由によって綾雄自らが景柄の養子と自称したとするの外はない。

次に史料七を見よう。この書翰は文中に「香川陸奥介も正月十六日落餅之本意相とげ、名も黄中と相改申候」とあるので、陸奥介景柄が法体となり黄中と改名した文化八年正月の書翰である。さて、香川景

「その後打たえ以二書中一御安否不レ承御無沙汰二打過候」とあって、久し振りの右近宛書翰である。さて、香川景柄を尊称なしに陸奥介と言いきりにしているのは、景柄と綾雄とが身内であることを示しており、景柄の位階昇進を披露し、それは「難レ有仕合奉レ存」ことであり、このことを「御風聴申上」て同慶の意を表しているのは、家族・親戚の間柄でなければ言えないことである。従って、「小子事、御殿向・養家とも至極都合宜御ざ候」の養家とは梅月堂を指していると考えられる。梅月堂側の記録（例えば梅月堂日並要處粗書抜）に全く見えない綾雄入家のことを、綾雄自身は何故もこう強調するのであろうか。しかも「菅沼此面綾雄」が香川家を養家と呼ぶ矛盾は何と説明できるであろうか。それであるが故に「御上京被レ下候得者、早速わたくし身上も可レ致二落着一、何角都合宜御ざ候。なにを申も遠国之事、ゆきとゞきかね申候。申上度事如レ海如レ山御ざ候得共、迎も筆紙二難レ尽、書外御察被レ下、なにとぞ御上京も被レ下候様ニ相成候得者、真二本懐不レ過レ之恭奉レ存候」と告げざるを得なかったのである。

このような複雑不明確な香川家と綾雄との関係が続くうちに、翌文化九年に至ると、香川家を去って別に香川家を立てている香川景樹に斐雄は歌学を問うに至っている。備中国浅口郡長尾村の小野務（一七八七年—一八五四）は、菅沼斐雄を香川大人（註、景樹）のもとにはじめてつれ行き

是も尚細谷川の水なれば 吉備の中山恋しくばくめ

おのれと同じ吉備人にて、木下うし（註、幸文）のをしへ子なりけるに、大人木下うしへ

立ちかへり今年も夏に成りぬれば 木下かげぞ恋しかりける

といふ歌よみておのれにことづけてやられたる頃なりければなむ（補遺拾葉 卷之二）

と記している。本家梅月堂から独立して別に梅月堂を称する景樹に就学した斐雄は、文政元年の景樹の江戸下向に随伴し、景樹の帰京後は江戸桂園社を差配して、桂園の歌風を関東に拡大するに努めるところがあった。景樹は言う、

(前略) 彼地(註、江戸) 着後妬心讒候之災ニ懸り候而、危急之難澁者仕候へドモ、於道義一者恥辱ヲ取候事無之歟と存候。滞留中逐日冤名も滅行、竟ニ増上寺一山より預請招候(中略)：帰後も関東聖堂儒生ヲ始其外許多門ニ入人只再遊而已相待候。景樹寓居之旅舎ヲ夕踰館と名付、門人菅沼頼母と申者景樹代トシテ立職、専教諭仕罷在、追々繁榮、剩其社之内兎山勝之進と申者、当春関東和歌講談所之助役ニ被召出候(下略)

(文政四年三月三十一日付  
徳大寺家中宛景樹書翰)

と。

かくしては、梅月堂から離反した景樹と、その門下に馳せ加わった木下幸文・熊谷直好・菅沼斐雄ら桂門歌人たちに對する梅月堂との対立關係が激しくなるのは当然であり、文政八年の香川梅月堂繼承問題の結果は熊谷直好の岩国脱藩を引きおこすに至るのである。

史料一 福武右近宛香川景樹書翰一

如月十三日貴札此比相達候処、野生出坂仕居候而、昨日宿より差越、辱拜見、先以御捕御安全奉欣喜候。御令郎御壯ニ御滞留被成候処、先比御帰國被成候由にて御出被下候へ共、在坂中不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>貴意<sub>一</sub>、残念之至、御餞別をも可<sub>レ</sub>仕候、跡にて宿より申越、背<sub>二</sub>本意<sub>一</sub>候儀御用捨可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>下候<sub>一</sub>。尚御帰國被<sub>レ</sub>成申候ハ、可<sub>レ</sub>然御致意奉<sub>レ</sub>頼候。別段以<sub>二</sub>書中<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>貴意<sub>一</sub>候。  
一 拙家養子之儀申人候処、被<sub>レ</sub>掛<sub>二</sub>御心頭<sub>一</sub>、御間合被<sub>レ</sub>下辱奉<sub>レ</sub>存候。則吉濱北村六郎次と申人之男二十歳ニ成人、才器も有<sub>レ</sub>之美質人品も御見及の由委細被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>、千万辱大慶仕候。  
於<sub>二</sub>京都<sub>一</sub>も所々より申來候へ共未<sub>レ</sub>決、其上少々此方勝手筋も御座候故、急々談し落合かね候。乍<sub>二</sub>無益之儀<sub>一</sub>御舍にもと得

貴意候。勢州藤堂家家老之次男、年々百俵づ<sub>レ</sub>付指越度申事ニ候へ共、末之為には宜御座候処、御存之通大炊御門様損金以來、長門介入家後同人事にも餘程無益之費有<sub>レ</sub>之、松田やしき止り申候御杯も、私へ引受遣候事杯有<sub>レ</sub>之、追々他借相重、當時四百金斗借財有<sub>レ</sub>之候故、右年々の処を十ヶ年分斗ひとつに當時被<sub>レ</sub>贈候事不<sub>レ</sub>相成<sub>一</sub>哉と申掛合、三角氏世話候て申出御座候。未此返事無<sub>レ</sub>之候。又桑名家老の末子十三に成候人御座候。是は浪花桑名やしき内門人有<sub>レ</sub>之、其世話に候へ共、餘り年わか<sub>レ</sub>候故如何と存居候。白川候家中、是ハ和歌も少々出来候よしに候へ共、貧生の様子ニ候。それも長門介も同様ニ而候へ共、其時と當時とハ勝手向違申候ゆへ、當時は右之助ニ成方望ニ御座候。外ニも江州八幡、京近在の郷士杯より申來候へ共、内々の処御座候故趣忽に定がたく候。

此所御舍御掛合御覽被<sub>レ</sub>下度奉<sub>レ</sub>存候。尤拙家へ納め候ものへ、岩国吉川家より年々銀貳貫目餘・米十五俵無<sub>二</sub>相違<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>贈候。本家は則岩国家老香川舎人と申、當時彼國奉行役相勤居申候。徳大寺家は御存の通、何も頂戴は不<sub>レ</sub>仕候故、勤仕は随意にて御座候。

右申候四百金の処、當時持参出来候ハ宜候へ共、左様成がたきと申様なるふり合に候ハ、當時百金ニ而も貳百金ニ而も携、其餘追々ニ被<sub>レ</sub>贈候歟、又當時何程年々何程付候こと歟、いづれニ而も不<sub>レ</sub>苦候。實は少々遠方の方宜候。藤堂杯餘り近く候故、彼方大家の事、付合もはり候而ハ却而迷惑ニ御座候。桑名ハ頻に当地役人すゝめ、為にも可<sub>レ</sub>成申候へ共、下拙年輪おひく<sub>レ</sub>つもり候上、家内御聞及被<sub>レ</sub>下候半、一向何之世話も不<sub>レ</sub>出来<sub>一</sub>候ゆへ、朝暮の介抱ニ困申候故見合居候。其餘二三軒之処申込候斗にて模様不<sub>二</sub>相聞<sub>一</sub>候。何卒北村氏早々御聞合、いづれと様子被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>候様奉<sub>レ</sub>頼候。

何分被<sub>レ</sub>懸<sub>二</sub>御心頭<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>下候段感謝難<sub>二</sub>申尽<sub>一</sub>候。貴境様子相分り候迄、外へ掛合も如何様共申延し置可<sub>レ</sub>申候間、吳々乍<sub>二</sub>御面倒<sub>一</sub>早々御掛合、模様被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>候様奉<sub>レ</sub>待候。旅窓紛々文段難<sub>レ</sub>分哉と奉<sub>レ</sub>存候。宜御賢察可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>下候<sub>一</sub>。恐惶謹言。

(文化二年)

五月廿七日

福武右近様

景柄

熊谷直好伝補遺 (兼清)

史料二 福武右近宛香川景柄書翰二

先比聞藤氏御持参之貴札浪花へ達、早々御答申入候。如何転達仕候歟、其後于今滞坂仕候。追々向暑に相成候。愈御安康被<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>御凌<sub>一</sub>候半と奉<sub>レ</sub>賀候。下官依旧罷在候。

然者先便被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>候北村氏子息の儀、何卒早々御聞合被<sub>レ</sub>下候様奉<sub>レ</sub>頼候。先比も得<sub>二</sub>貴意<sub>一</sub>候通、方々申来候へ共、可<sub>レ</sub>成ハ遠方之方宜、其上人体も御存の由候故安心ニ御座候間、相談出来候儀なれば急々仕度候。若謝物等之所にかの方不<sub>レ</sub>仕<sub>レ</sub>任意事も候へ、如何様共談じ可<sub>レ</sub>申候へ共、御存之當時の拙家故、即時少しハ無<sub>二</sub>御座<sub>一</sub>候而ハ、居宅等の取繕も出来かね候。永ク借宅にて不<sub>レ</sub>安、又費も有<sub>レ</sub>之候へば、何角相応ニ成候ほどの事ハ即時入用御座候。借財等は夫々当も御座候事故、追々形付候而も不<sub>レ</sub>普訳に候。夫も形付ニハかゝりハなく候へ共、此方勝手斗申而も成がたき物ゆへ、内々得<sub>二</sub>貴意<sub>一</sub>置候。彼是御賢察よろしく御掛合御覽被<sub>レ</sub>下様奉<sub>レ</sub>頼候。

一 近比乍<sub>二</sub>御世話<sub>一</sub>御便有<sub>レ</sub>之候へ、此たん冊岡惣右衛門の方へ御遣し可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。かの老母は物故の様承候へ共、いづれ所望之事ゆへ遣し申候。餘期<sub>三</sub>重便之時<sub>一</sub>候。頓首。

(文化二年)

六月十六日

景柄

福武右近様

史料三 福武右近宛香川景柄書翰三

去月十一日貴書此比到来拜見仕候。先以御安全奉<sub>レ</sub>賀候。御令政様御同様之由、嗚々御心配之御事奉<sub>レ</sub>察候。時氣冷々相成候。尚々御加養專一奉<sub>レ</sub>存候。

然者、又々北村生之事被<sub>二</sub>仰聞<sub>一</sub>承知仕候。此儀ハ朔ニ返書、万茂へ頼遣候。其時いつ比達候哉相尋候処、中比迄には無<sub>二</sub>相違

届候様被<sub>レ</sub>申候故、もはや其御返事可<sub>レ</sub>参と日々相待居候。決定承候上藤堂家之方断申度候間、早々御返答相待候。

一 彼持参物の事も、十年後と申事、下拙齡それ迄難<sub>レ</sub>期候へ共、人物御存にて宜由被<sub>レ</sub>仰候ゆへ、是第一の事に候故、唯天底迄決し<sub>二</sub>虫食<sub>一</sub>事も近比東六條歌流行、御連枝学寮講師達其外餘程門人御座候ゆへ、此社中より世話候て、東本願寺寺内袋町と申所ニ借家有<sub>レ</sub>之を社中より借候而引移候様被<sub>レ</sub>申候故、此比転宅仕候。

【虫食】候へ共、間数も有<sub>レ</sub>之、勝手ハ宜候。追々社中もまし候は、又宜道も可<sub>レ</sub>有、先暫右之通ニ而、居宅之事ハ安心仕候。

家内御存之通無人ニて、何もかも自身仕候事ゆへ、見え候人物も其所よく承知、且御殿向いろくふり合も御座候故、先学生の心にて本人も居候様仕度、若御親類方御上京候共無<sub>二</sub>御沙汰<sub>一</sub>様、長門介邊も先無沙汰ニ仕置候。左様御舍可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。

右貴谷且先書届候程も無<sub>二</sub>覚束<sub>一</sub>、かたぐ如<sub>レ</sub>此御座候。転宅後一向取込、乱筆よろしく御察可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。乍<sub>レ</sub>末御令息様へもよろしく奉<sub>レ</sub>頼候。松田も此比は京住、宜申上度申候。早々。

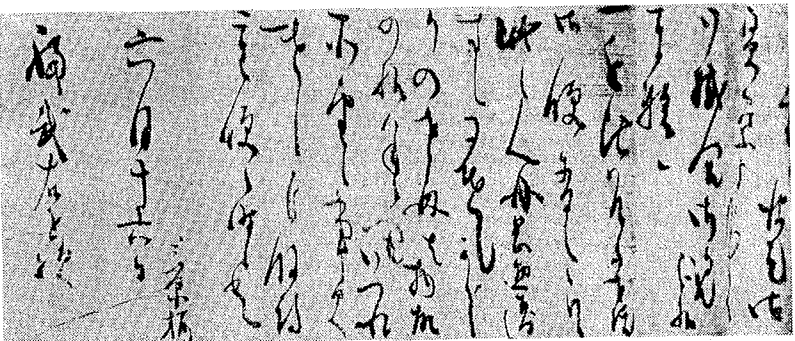
(文化二年)

閏八月廿七日

景柄

福武君

史料四 福武右近宛香川景柄書翰四



福武右近宛香川景柄書翰 (小野招月亭藏)



八月十一日貴書昨日相達拜見、昨今涼氣至候処御安全被<sub>レ</sub>成御凌奉<sub>レ</sub>賀候。先達而は少々御勝も不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候。れう明半御尋書も可<sub>レ</sub>呈存居候へ共、繁務の上、昨今年々殊外門人も多成、一人にて一向行届不<sub>レ</sub>申、いつかたにも意外御無音背<sub>三</sub>本意<sub>一</sub>候。御海怒可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。

御賢息様にも大和越村服部氏へ御寄宿被<sub>レ</sub>成候由。大和の何方之邊に哉。南都近き所に越村と申所不<sub>レ</sub>存候。御序委被<sub>三</sub>仰下<sub>一</sub>候。又幸便も御座候へ、呈書も可<sub>レ</sub>仕候。

扱浪花にも月次出来、隔月ニ下り申候処、春來繁多怠、七月上旬下り申候処、堺ニも罷越、外ニも少々借用掛りも有<sub>レ</sub>之于<sub>レ</sub>今滞坂、御状京より指下拝見仕候事ニ御座候。鄙詠も多く候へ共、少々入<sub>三</sub>御覽<sub>一</sub>候。例之龜吟赤面之事ニ候。

一 養子の事被<sub>レ</sub>掛<sub>二</sub>御心頭<sub>一</sub>辱奉<sub>レ</sub>存候。是も未定。藤堂之方も去年冬勢州へ罷越候序、於<sub>レ</sub>津承合候處、好悪半々候故、強而もすゝみ不<sub>レ</sub>申候。此事又今春申来候人御座候へ共、右之通ゆへ其儘ニ仕候。いか様吉濱の人病氣如何候哉。格外之事ニ無<sub>レ</sub>之候へ、於<sub>二</sub>京師<sub>一</sub>治療いたし可<sub>レ</sub>然道も候半敷。猶御賢慮御聞合も被<sub>レ</sub>下候様奉<sub>レ</sub>頼候。

一 松田事も大坂主人共方やしき産物登し引合不<sub>レ</sub>申候。暫相止候而武邊へも達、屋敷先引拂申候ゆへ、京へ帰り下拙居申候跡新町ニ居申候。毎々御傳聲辱奉<sub>レ</sub>存候。同人近年病氣にて去年俸召連國へ下り、俸代動内願仕其通被<sub>レ</sub>申付、何か俸十郎相勤居申候。毎々御懇御尋被<sub>レ</sub>申候故御傳申上候。旅窓<sub>□□</sub>今日も外方当座出掛早々申残候。時氣御自重被<sub>レ</sub>成候。頓首。

(文化二年)

九月三日

景柄

右近様

史料五 福武右近宛香川景柄書翰五

尚<sub>レ</sub>愚詠短冊被<sub>レ</sub>下候様候へ、先是ニ而御手向可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。

九月三日附之貴書延着、今月八日敷相達、又十月八日之御状此比到来、先以時候無<sub>二</sub>御障<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>入欣然奉<sub>レ</sub>存候。

御令室様には終に不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>御養生<sub>一</sub>、先月十三日御遠行之由、嘸々御愁傷御心配共奉<sub>レ</sub>察、山々氣毒拜上候。就<sub>レ</sub>右御書残しのうたの事被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>、拝見落儀仕候。ずいぶん能聞え候。御辭世に自然と叶ひ申候。

下句 あだなる<sub>○</sub>翁の世にこそ有けれと候ても可<sub>レ</sub>然。御詠のまゝにても聞え候へども、石碑にも御彫被<sub>レ</sub>成候へ、御改も可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成敷、御随意と奉<sub>レ</sub>存候。先任<sub>レ</sub>仰書付申候。

一 吉濱一件大ニ御心配畏入奉<sub>レ</sub>存候。御細書之旨承知仕候。かの藤堂の方も彼方一子出すニ付、婦人の了簡不<sub>レ</sub>定よし、是又不出来と聞え候。北村病氣とんと本復成がたき趣敷、此方も大半ハ夫々心中定置候故甚残念存候。尚又御賢慮可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。此比京より一軒申来候へ共、餘り近く候故如何と存居候。万々後便ニ申上候。御悔かた<sub>レ</sub>御答如<sub>レ</sub>此御座候。御令息様も宜

く御致意可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。恐惶謹言。

(文化二年)

十月廿一日

景柄

右近様

尚<sub>レ</sub>かの御詠、南の字の事、御書被<sub>レ</sub>成候敷、碑面ニ書もくど<sub>レ</sub>しく候半敷。うた斗なら、初句 とにかくに と申方よからん敷と存候。是又御随意と奉<sub>レ</sub>存候。先申残候也。

史料六 福武右近宛菅沼綾雄書翰一

尚<sub>レ</sub>三馬之助一条あまり<sub>レ</sub>残念ニ奉<sub>レ</sub>存候。なにととも<sub>レ</sub>此上御苦勞一入<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>希候。万々一外方ニても相應の義御ざ候は<sub>レ</sub>御世話偏ニ奉<sub>二</sub>願上<sub>一</sub>候。右外太平帰郷の節と早々申留候。かしく。

一 輪皇上仕候。秋暑難<sub>レ</sub>堪御座候所、御奉家彌御安泰被<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>御座<sub>一</sub>恭喜不<sub>レ</sub>斜奉<sub>レ</sub>存候。まことに過日ハ罷越、暑中かれこれ御苦勞被<sub>二</sub>成下<sub>一</sub>、御かけにて敵父不興被<sub>二</sub>差赦<sub>一</sub>、久々ぶりにて対顔仕、大悦無<sub>二</sub>此上<sub>一</sub>御礼ハ筆紙難<sub>レ</sub>尽奉<sub>レ</sub>存候。

布慈儀も先月廿八日夜吉濱より乗船、廿九日未明同所出帆、當三日未刻比浪花着、無<sup>二</sup>夜舟<sup>一</sup>にて四日九ツころ無難ニ帰京、翌五日早朝より出勤、兩日御法事首尾能相勤、七日の式日終日相つめ、八日九日右御法事ニ付御參詣御代拜等有<sup>レ</sup>之候、御方々へ御挨拶御使相勤候所、九日夜より少々相勝不<sup>レ</sup>申引蒙申候。しかし時氣あたりにて追々快、昨日より出勤仕候。此段御懸念被<sup>二</sup>為<sup>一</sup>下一間敷候。

一 先に御たのみ申置候西山三馬之介一条いかゞ御さ候哉。其后古郷朋友どもより伯父方へ懸合くれ候様子ニ御さ候や。此間かめや太平上京、承候得は同人参りがけ伯父方へ立寄相すゝめ候所、甚不進ニ御さ候よしニ御さ候。さ候得は十が九不出来と奉<sup>レ</sup>存候。さてくせひなき御事甚残念ニ奉<sup>レ</sup>存候。乍<sup>二</sup>此上<sup>一</sup>なにとぞく御かけにて相調候様ニと祈候御事ニ御さ候。

一 御契約申候堂上御染筆、前文の仕合にていまだ相調ひ不<sup>レ</sup>申候。なに様近々差進可<sup>レ</sup>申候。延引の所真平御海怨可<sup>レ</sup>被<sup>二</sup>為<sup>一</sup>下<sup>一</sup>候。

一 御賢兄様よりたのみの儀、早速養父景柄へ申聞候所、甚満足仕、某より外ならず奉<sup>レ</sup>存候事、少しも無<sup>二</sup>御遠慮<sup>一</sup>御詠草御登候様ニと申候事ニ御さ候。此たびハ差急愚詠も呈不<sup>レ</sup>申、乍<sup>レ</sup>憚可<sup>レ</sup>然被<sup>二</sup>仰上<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>被<sup>二</sup>下<sup>一</sup>候。

一 守屋の方へも此たびハ書状得遣不<sup>レ</sup>申候。不<sup>レ</sup>遠太平帰国仕候ま、其節委敷申遣候間、御出會候はよろしく御取合可<sup>レ</sup>被<sup>二</sup>下<sup>一</sup>候。

いまだ残署御さ候条御自重肝要奉<sup>レ</sup>存候。不快中乱毫真平御免可<sup>レ</sup>被<sup>二</sup>下<sup>一</sup>候。

先ハ右御礼旁得<sup>二</sup>御意<sup>一</sup>一度如<sup>レ</sup>此御さ候。以上。

菅沼此面  
布慈(花押)

(文化四年)  
七月十九日

福武右近様

玉座下

史料七 福武右近宛菅沼綾雄書翰二

鳳曆之御賀儀萬國同風目出度申籠候。彌御安榮被<sup>レ</sup>成御越年珍重不<sup>レ</sup>斜奉<sup>レ</sup>存候。綾雄無異加壽仕候。先ハ右年頭御祝詞申述度如<sup>レ</sup>此御座候。猶期<sup>二</sup>永日之時<sup>一</sup>候。恐々謹言。

菅沼此面

綾雄(花押)

(文化八年)  
正月廿四日

福武右近様

玉案下

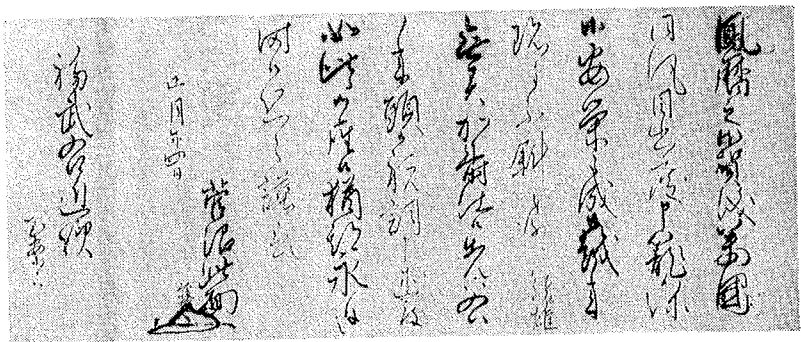
再陳

その後打たえ以<sup>二</sup>書中<sup>一</sup>御安否不<sup>レ</sup>承御無沙汰ニ打過候。時氣障も不<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>在御安泰可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>入候哉。小子至て丈夫ニ相つとめ罷在候。はゞかりながら御懸念被<sup>二</sup>下<sup>一</sup>まじく候。

さて香川陸奥介も正月十六日落座之本意相とげ、名も黄中と相改申候。位階者相進被<sup>レ</sup>任<sup>二</sup>正六位上<sup>一</sup>難<sup>レ</sup>有仕合奉<sup>レ</sup>存候。此段乍<sup>レ</sup>序御風聴申上候。

一 旧来被<sup>二</sup>仰越<sup>一</sup>候有栖川宮関東御下向之事、御延引之御様子ニ御さ候。さぞ御残多被<sup>二</sup>思召<sup>一</sup>存候。

一 小子事、御殿向養家とも至極都合宜御さ候。なほ實父手前宜御取向一入奉<sup>二</sup>願



福武右近宛菅沼綾雄書翰 (小野招月亭藏)

上<sup>一</sup>候。さて尊君當春御上京被<sup>レ</sup>下候事者不<sup>二</sup>相成<sup>一</sup>哉。御上京被<sup>レ</sup>下候得者、早速わたくし身上も可<sup>レ</sup>致<sup>二</sup>落着<sup>一</sup>、何角都合宜御さ候。なにを申も遠國之事、ゆきとゞきかね申候。中上度事如<sup>レ</sup>海如<sup>レ</sup>山御さ候得共、迎も筆紙<sup>二</sup>難<sup>レ</sup>尽、書外御察被<sup>レ</sup>下、なにとぞ御上京も被<sup>レ</sup>下候様<sup>二</sup>相成候得者、真<sup>二</sup>本懐不<sup>レ</sup>過<sup>レ</sup>之忝奉<sup>レ</sup>存候。

一 御哥者如何。小子不<sup>レ</sup>絶よみ候得共、わら歌ばかり恥入候得共、此ほどの當座のうた少々入<sup>二</sup>御覽<sup>一</sup>候。御天文可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下候。御高詠拝聴奉<sup>二</sup>願上<sup>一</sup>候。御舎兄様へ如何。不<sup>レ</sup>絶御詠被<sup>レ</sup>成候哉。久々以<sup>二</sup>書中<sup>一</sup>御安否伺上申候。乍<sup>レ</sup>憚宜御傳聲可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下候。尚期<sup>二</sup>後音<sup>一</sup>候。かしく。